不機嫌な恋人

田辺聖子

講談社文庫

講談社文庫

常州大学図書館
藏書章

不機嫌な恋人

田辺聖子

講談社

|著者| 田辺聖子　1928年大阪府生まれ。樟蔭女子専門学校国文科卒。'64年『感傷旅行（センチメンタル・ジャーニィ）』で第50回芥川賞、'87年『花衣ぬぐやまつわる……』で第26回女流文学賞、'93年『ひねくれ一茶』で第27回吉川英治文学賞、'94年第42回菊池寛賞、'98年『道頓堀の雨に別れて以来なり』で第50回読売文学賞、第26回泉鏡花文学賞、第3回井原西鶴賞を受賞。'95年紫綬褒章、2000年文化功労者に選ばれ、'08年には文化勲章を受章。小説をはじめ古典や評伝、エッセイ等著書多数。'07年にはデザイナーの乃里子を主人公とした『言い寄る』『私的生活』『苺をつぶしながら』の三部作が新装版として復刊され、世代を超えて女性たちの支持を集めている。近著に『田辺聖子の古典まんだら』（新潮社）、『われにやさしき人多かりき』（集英社）など。'11年5月末には最新刊『一生、女の子』（講談社）が刊行される。

不機嫌な恋人
田辺聖子
© Seiko Tanabe 2011

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2011年5月13日第1刷発行

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話　出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン—菊地信義
本文データ制作—講談社プリプレス管理部
印刷———信毎書籍印刷株式会社
製本———株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。
本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-276965-5

不機嫌な恋人　5
あとがき　田辺聖子　364
解説　小池真理子　366

講談社文庫

不機嫌な恋人

田辺聖子

講談社

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

不機嫌な恋人　5
あとがき　田辺聖子　364
解説　小池真理子　366

不機嫌な恋人

「いいえ、パトリス。恋なんて、美しくなんかないわ。
いまちょっと、そう思うだけだわ」

コクトオ・映画〈悲恋〉

1

若い男が一人、西洞院大路を下って東の市に近づく。大路は夏の名残りの暑さがまだ去りやらず、白い砂埃が立ち、家々の板葺きの屋根は反りかえっている。人々の往来は烈しい。馬売りが数頭の馬を引き連れてゆく。東国から旅してきたのか、人も馬もしとどに汗にまみれている。埃をかぶった黒い市女笠を傾ける女、頬にキズのある赤髪の侍、くたびれた旅僧。

「薪いらんか」

「炭いらんか」

と頭上の商いものを呼ばわるのは八瀬や大原から来た販ぎ女である。身分ありげな者も通るが、下人も行く。鼠色の小袖をひっかけ、藁しべで白髪を束ねた薄汚い老婆やら、手なしの汗じみた胴着に、膝までの四幅袴という風体の下人。肩のあたりの色がさめた狩衣に、揉烏帽子の小者。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

その中をゆく一人の若者。年のころ十七、八ばかり、どこかのお邸の従者であるのか、小綺麗な狩衣をお仕着せに頂いている。自分ではぬけ目なく立ち廻っていると思いこんでいるが、人から見ると年相応に間のぬけたところもあるという表情、しかしそれはこの若者の責任ではなく、年齢のもたらす哀れさ、というものであろう。

実はこの若者が、物語の発端となる仕掛人であるが、勿論、本人はそんなことは知らないわけである。

この男、最近、田舎から上ってきたのか、都が珍しくて仕方ないようである。といってまんざら昨日今日の都、というのではないらしい。足にまかせて毎日、京の町を探訪して、かなり地理や人の往来にも馴れ、それだけに一層、ますます京の町の魅力に捉われているといったところだろう。

今日も、何か、主のご用で出かけたとおぼしいのに、町の雑踏と賑わいに気を取られて、肝腎のご用はついつい忘れがちという風情。

市へ入ると、目を丸くして、忙しげに左右の店に見惚れてしまう。

山芋や豆、青物を売る店、酒の計り売り、米の計り売り、太刀屋、布屋、櫛・化粧道具の店、鏡屋、藺笠・市女笠、その隣には屋台も出ているのであった。油で揚げた団子を食べさせるもの、蒸した粟に、瓜の塩漬を添えたもの。干し魚は干し鮎に干し

鮑、するめ……市のはずれには乞食たちが皿を前に坐っている。若者は再び路地を右へとり、幾つも折れた路地ごとの店を、飽くことなく楽しむ。どの路地も人の出さかりだった。

きれぎれな声が若者の耳に入る。

――人攫いが昨日も高倉小路のちょいとした家の男の子を攫っていった。まだ五つだそうだなあ。この頃よく子供が消える……

――閑院の左大臣と、二条の右大臣の長い対立と確執は誰知らぬ者もないが、ここだけの話、左大臣は……

――東国から都へのぼったのは、女あつめですよ。都の女は眉目よくしおらしいというので、東国の物持ちや地侍たちは喜びますのでね、それらの殿御に頼まれて、お妾さがしでございますよ、はい……

――知ってるかい？　この京の町の地の底を。縦横に穴が掘られているという。町中どこへでもいけるという怖ろしい穴。延暦のころからもうあったとよ。そのころ内裏に出た物の怪や幽霊はみな、地底から湧いて出たという。穴はいつとなく捨てられて忘れられ、地上の出入口は塞がれたが、この頃、どこかで誰か知れず、こっそり穴を掘り返しているそうな……どこの抜け穴だか、熊が迷いこんで餓死していたという

ぜ……盗人の一団が逃げ道に使っているらしい。ふと出てみたら、大内裏後宮の壺庭で、天皇のお后が眠っていられるご寝所の前だったって……誰も信じないが。

——高辻の金貸し。あれはずいぶん強欲だとさ。その代り、蔵にはごっそり金銀の山……

——五条に市女紹介所があるよ。そこへいけばピンからキリまで女は揃っているって。攫われた姫君もそこにいたとさ……

そんな話声が風のように、天啓のように耳に入ってくるのが、市の雑踏である。若者は耳を掠めるそれらの声もいそがしく拾いあつめ、期待と或るたかぶりに、鼻の穴も心もふくらませる。

何でも売っている京の市は、この都では何でも起り得るような気にさせてしまう。京へ来ると若者は、いつも刺激されて昂揚する。

そのたかぶりが奢りになる。若者は故もなく肩をそびやかし、肩肘張って、東の市を出はずれて、塩小路を更に東へ歩く。ついで烏丸小路を北上し、七条坊門の角の邸に入ってゆく。

入ってゆくといっても、門はやりすごしてすたすたと築地の塀に沿ってあるき、その破れ目から平気で踏み込んだのである。

邸の門は堅く閉じられ、いつ開けられたかも定かでないほど、錠が錆びていた。築地の破れ目は草が踏みしだかれて、おのずから人の歩く道ができている。あるいはこの邸の人々も、ここを利用して出入りしているのかもしれない。そして邸の主人は、もう何年も門から出たことはないのかもしれない。

しかし若者はこの邸の人間ではないようで、木の枝らしいもので草むらを払い払い、

「蛇がいそうだなあ……」

と気味わるそうにひとりごちて、庭の奥深く入ってゆく。あたりは深山のような木々の匂いである。

邸内は更に荒れ果てていた。古びた池にはおどろおどろしく水藻がはびこり、枯葉の降り積むに任せられてある。

木々には蔦かずらが生いまつわり、それが垂れて揺れているさまは、さながらお化け屋敷。遣水は涸れ、石の灯籠は壊れたまま、丈高く伸びた草むらに没している。

母屋の建物と、その東の対の建物との間に渡廊があるが、勾欄は朽ちてしまっているありさま。それでも構えは大きく、昔は立派な邸宅だったように思われる。

これも朽ちかけた中門をくぐると、寝殿の内庭との間に目のあらい低い籬垣があ

り、簀子縁に女の子が三、四人かたまっているのがみえた。
たけだけしいばかり生い繁った雑草や、木々の繁みの中、そこだけ、ぱっと華やかである。みな十二、三の童女たちで、つややかな黒髪が輝いて、色とりどりの袿の色が若者の眼にはまぶしくみえる。
「おうい」
と彼は手を挙げて呼ぶ。女の子は一斉にふり向き、口々にいった。
「あ。また来た」
「また来たはないだろ」
若者は垣をまたいで縁に近寄り、頓狂な金壺まなこで、蔀を上げた室内を覗くようにするが、御簾が下がっていて奥は見えない。
「覗いちゃダメ」
女の子の一人がいそいで立って、両手をひろげて若者の視線を遮りながら、
「男の人は入れちゃいけない、覗かせちゃいけないって、浅茅の君がおっしゃったんだもの」
まだ歯黒めもしていない少女だが、桃色の頬に黒髪が美しい。そうして若者を見下したようにツンとしているのは、よくせき、浅茅の君とかいう女から吹きこまれてい

るに違いない。若者に対する反感と軽侮を隠そうともしない。
「まあそういうなよ、何だ、貝合せをしていたのか、おれだっていいもの持ってるぞ、仲間に入れてくれるなら見せるよ」
若者はふところに手を入れる。いつぞや主人の使いで上臈のお邸へ行ったとき、階段に落ちていたのをくすねたもの。
「ほら」
と見せたが、女の子は冷たく、
「要らないわよ。あんたの安物なんか。仲間にも入れてやらない。それに案内もなしにズカズカ入りこんでくるって失礼だわ。この前、浅茅さまがあんなにこっぴどくお叱りになったのに、まだ懲りないの」
「都の女は、子供でも気が強いな」
と男は呆れたさまで、ふところから手紙を出し、
「これをお前さんたちの女あるじに届けてくれ、お返事を貰うまで動かないから」
「手紙も取り次いじゃいけないって言われてるんだから、さっさと持ってお帰り」
「おやあ。お前、豆粒みたいに小さい体で、反っくりかえって、よくもそう威張った口が叩けるもんだ、この野郎」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com